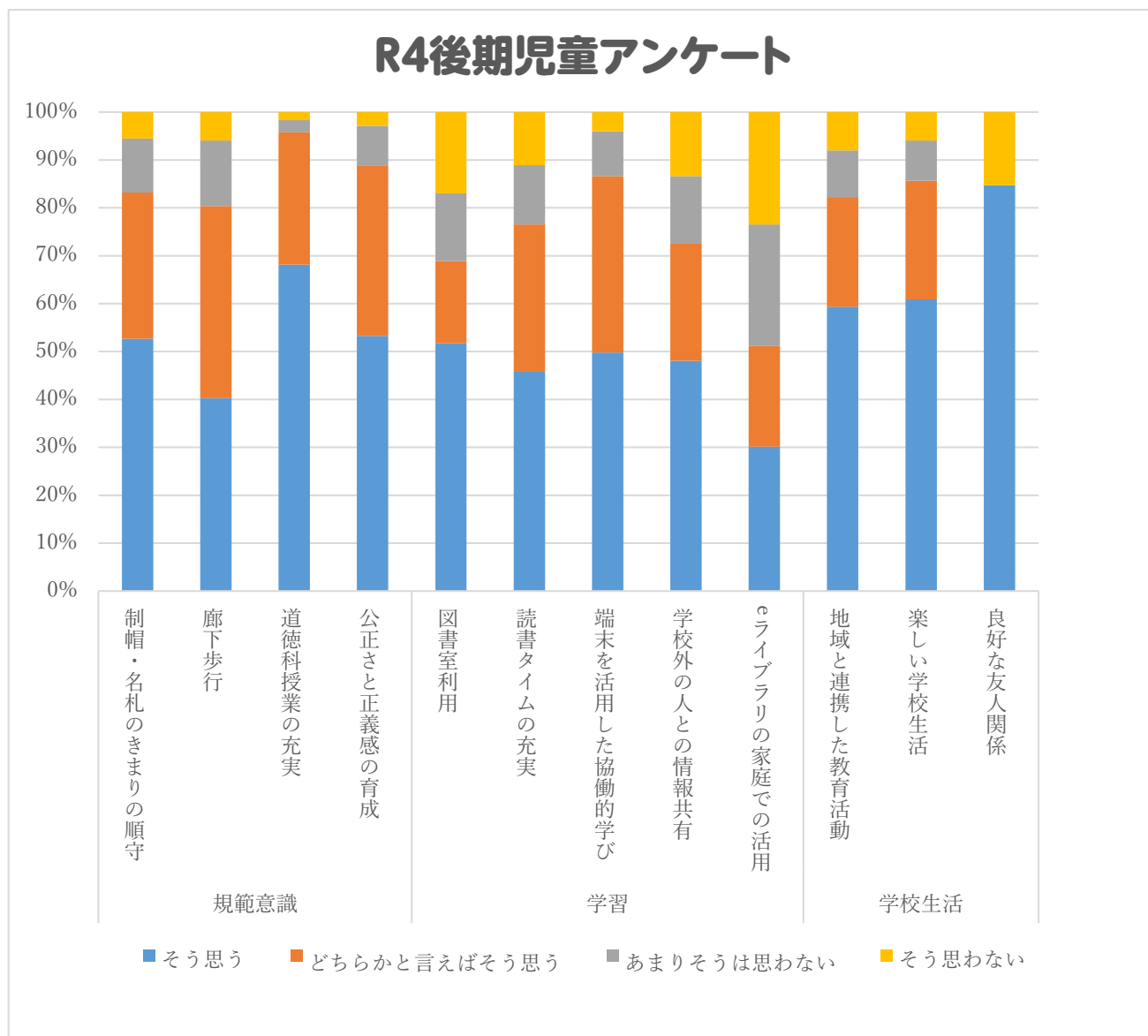


<令和4年度 後期 児童アンケート R4.11.24 実施>



1、規範意識の向上に関すること

(1)制帽を着用して登校しましたか。また、校内では名札を付けていましたか。

「そう思う」と回答した児童は52.7%、「どちらかと言えばそう思う」と回答した児童は30.5%で、合計83.2%の児童が肯定的な回答をしましたが、前期アンケートよりも2.8ポイント低い結果になりました。昨年度は制帽を着用して登校する児童が、特に高学年で少なく、修学旅行前に「制帽がない。」「制帽が家のどこにあるかわからない。」という児童がいて、制服と制帽の着用は「学校生活のきまり」に記載されている事柄であるにもかかわらず、どうしてなのだろうかと教職員は疑問に思いました。また、チャイムを守ることや昇降口の開門時刻を守って登校する約束もなかなか子どもたちに浸透せず、『自分ルール』を貫く児童や、規則を守る指導をしても、「(守っていないのは)自分だけじゃない。」と反省できない児童もいました。そこで、本年度は規則や決まりをきちんと守る子どもを育てようと思い取り組んだことの 하나가、「制帽の着用」です。前期よりも肯定的回答率は少し下がりましたが、昨年と比べると、はるかに着用率は高く、特に高学年は全校児童のお手本になっています。これからも「当たり前のことを当たり前でできる」児童でいてくれるよう、教職員は指

導を続けます。

(2)廊下を走らず、右側を歩きましたか。また、雨の日の遊び場にしませんでしたか。

この設問に「そう思う」と答えた児童は40.3%、「どちらかと言えばそう思う」と答えた児童は40.1%で、合わせると80.4%になり、前期アンケートよりも3.8ポイント増えました。鹿ノ台小学校は児童数の割に廊下の幅が狭いので、学年によって上り下りする階段や廊下を決めています。特に、給食準備や後片づけで全校児童が一度に校舎内を行き来する際の混雑の度合いがひどいため、学級担任は必ず児童を先導して廊下や階段を歩きます。しかし、休み時間になると運動場に早く出ようとボールを持った子どもが一目散に廊下を走る姿があり、とても危険でした。そこで、教職員は、右側歩行の約束を守る子どもを増やす取組として、走る子どもに注意するだけでなく、歩いている子どもたちを褒める指導を心掛けました。前期よりもわずかながら肯定的回答が増えたのは、その効果が少しずつ出てきた現れかもしれません。

校舎内の廊下や階段だけではなく、登下校中も交通ルールを守って安全に過ごせるよう、地域の皆さんにも協力いただき、取り組みを進めていきたいと思えます。

(3)良いことと悪いことの区別をつけること、間違いを素直に認めること、規則や決まりを守ることを、道徳の時間に勉強できましたか。

この設問に「そう思う」と回答した児童は68.1%、「どちらかと言えばそう思う」と回答した児童は27.7%で、合計95.8%が肯定的な回答をしています。週に1時間、年間35時間の道徳科の授業では、実践をすぐに求めるのではなく、心をじっくりと育成するような授業展開になるよう教員は工夫し、中でも規範意識の向上にかかわる内容は、学期に一度は行うようにしました。道徳科の時間の中心発問は「なぜそうしようと思ったのか。」です。正しい道を貫くことや良い行いをすることの難しさ、人間の弱さを学級全体で共有することで、子どもの豊かな心が育まれます。本校の全国学力・学習状況調査の結果を見ると、自己肯定感や社会参画の意識が低い子どもたちがいますので、道徳科の学習で人としての生き方を考え、よりよい社会の形成に努める態度を養わなければいけないことを痛感しています。

また、道徳科の学習は生徒指導にもつながるものです。授業の中で規律や規則の大切さや子ども同士で相互に尊重しあう温かさを実感させ、いじめをなくしていかなければならないと思いました。

(4)友だちにも先生にも、真心を持って公平な態度で接し、みんなで協力して良い学級や学校を作っていこうとしましたか。

「そう思う」と回答した児童は53.2%、「どちらかと言えばそう思う」と回答した児童は35.5%で、肯定的な回答をした児童は88.7%、前期よりも1.7ポイント低くなっています。今年度の調査で、生駒市ではいじめの認知件数が増加し、小学校では暴力行為の件数も増えました。トラブルが起こった時の子どもたちの様子を見ていますと、近年は、他人の気持ちを察することができない、人に譲れない、幅広い仲間づくりができない、といった傾向があります。気心の知れた特定の友達との結束力は強いが、それが学級や学校の規律や道徳性を損なう方向に向くこともしばしば見受けられました。

そこで、子どもたちがより良い人間関係を築けるよう、朝の会では順番でスピーチをしたり、帰りの会では友達の良さを紹介しあい、互いに認め合う時間を確保したりしている学級があります。また、児童会活動として、思いや願いが出せる議題箱を設置し、子どもたちが日常の問題に気づき、話し合っ解決できるようにしました。本校は長年、異年齢児童でグループを編成し、縦割り班活動も行っています。狭い人間関係から脱却し、誰とでも協力して活動できるように、学級でも学校全体でも多様なグループ活動を充実させていかなければ

ばならないと思いました。

2、学習について

(5)図書室で本を借りて読んでいますか。

「そう思う」と答えた児童は 51.7%、「どちらかと言えばそう思う」と答えた児童は 17.2%で、合計 68.9%が肯定的回答をしています。しかし、前期アンケートの結果に比べますと 3.0 ポイント減少しました。それは、運動会の練習など、休み時間の活動が多かったことにも起因していると思います。しかし、秋の読書週間には、「先生おすすめの本」として、全教職員が本の紹介文を書き、図書室の廊下に掲示しました。また、様々な種類の本を読む企画を図書委員会が企画し、その褒賞として図書委員が手作りした菓を配り、図書室利用者が増加するような取組を行いました。図書室の本の貸し出しは、11月末日で、1年生 2013 冊、2年生 1979 冊、3年生 1967 冊、4年生 1341 冊、5年生 1258 冊、6年生 767 冊で、学校全体では 9325 冊の貸し出しがありました。平均すると児童一人がひと月に借りる図書室の本は約 2 冊です。少ないように思われますし、利用者は低学年に多い傾向ですので、高学年にもそれが広がるよう、高学年向きの蔵書の充実を考えたいと思います。

(6)毎週月曜日と金曜日の読書の時間には、あらかじめ自分で読む本を決め、20 分間集中して本を読んでいたか。

「そう思う」と回答した児童は 45.8%、「どちらかと言えばそう思う」と回答した児童は 30.7%で、肯定的な回答をした児童は 76.5%でしたが、前期アンケートよりも 3.9 ポイント低下しています。子どもたちの様子を見ると、中学年ぐらいから読書の二極化が表れ始めています。本が好きで少しの時間でも暇を惜しんで本を開いている子がいる一方で、読書の時間になってから学級文庫の書棚に自分が読む本を探しに行き、ページをペラペラとめくって20分間を過ごす子も増えます。この時期に、素敵な本に出会い、本を読む時間を確保できているかで、本に親しむ子とそうでない子に分かれるように思われます。

教科書を読むだけでは子どもの語彙力や表現力は高まりません。今年は夏休みの応募作品で、たくさんの高学年児童が読書感想文を書いており、その内容のすばらしさに驚きました。読書時間の確保は普段の生活ではなかなかできないと思いますので、学校では長期休業中の家庭での読書を進めていこうと思います。

(7)タブレット端末に学習の資料や自分の考えを入力し、みんなに知ってもらうことができましたか。友だちの考えに対して、賛成や反対の意見を言えましたか。

この設問に対して「そう思う」と回答した児童は 49.8%、「どちらかと言えばそう思う」と回答した児童は 36.8%で、合計すると 86.6%になり、前期の 53.6%から、33 ポイントも上昇しました。ロイノートを使って自分の意見を書き込み、学級全員でそれを共有する授業スタイルが少しずつ定着しています。こうすることで、発表するのが苦手な子でも、自分の考えを表明できるようになりました。「友だちと意見が違ったらどうしよう。」という不安が払拭できるのが利点で、教員は大型スクリーンで全員の意見を映しながら、普段意見を言わない児童にも発表する機会を与えます。

前期アンケートから飛躍的に肯定的回答率が上昇した背景には、教職員の研修体制や ICT 支援員の支援体制が整ったことがあります。2学期はミニ教職員研修をひと月に一度ほど行いましたし、ICT 支援員が低学年児童に直接授業を行う時間が増えました。今後もこのような取り組みを継続していきたいです。

(8)授業中に、タブレット端末で、その場にはいない先生や友だちと勉強することがありましたか。

この設問に「そう思う」と回答した児童は48.1%、「どちらかと言えばそう思う」と回答した児童は24.4%、合計72.5%が肯定的な回答をしており、その割合は前期よりも13.6ポイント上がりました。病気以外の欠席児童や不登校児童に対するオンライン学習は、全学級で定着しました。教室にいなくても、その子どもたちとつながって、意見を交わしあいながら授業を進められる仕組みは、今後も非常に重要です。大人もコロナ禍で在宅での仕事が増え、通勤しなくても仕事ができる環境になってきましたが、子どもたちが大人になる時には、そのような仕事スタイルがもっと増えていくのではないのでしょうか。そのため、ICT教育機器でその場にはいない人とかかわる体験を、生駒市ではキャリア教育の一環として積極的に導入しています。3学期は6年生が1週間かけて毎日1時間ずつ、市内全小学校の6年生と一緒にタブレット端末を活用して平和学習をします。他の学年も積極的にこのような学習ができるよう、計画を立てています。

(9)e ライブラリを使って、家で勉強しましたか。

生駒市では全ての小中学校にeライブラリという学習支援アプリを導入しています。しかし、この設問に「そう思う」と回答した児童は30.2%、「どちらかと言えばそう思う」と回答した児童は21.0%しかいませんでした。この回答を合計すると51.2%しかありません。家庭学習にeライブラリを活用しきれていない実態があります。週に1度はeライブラリを使った家庭学習の課題を出すことが年度当初の目標でしたが、まだまだできていないようです。夏休みの課題として毎年購入していたワークブックを、本年度6年生はeライブラリでの学習に切り替えました。他の学年も長期休暇の課題をeライブラリで設定できるよう、計画を立てて取り組みたいと思います。

3、学校生活全般について

(10)地域の方に教えてもらったり、一緒に活動したりして思い出に残る勉強ができましたか。

この設問に「そう思う」と回答した児童は59.4%、「どちらかと言えばそう思う」と回答した児童は22.9%で、合計82.3%が肯定的回答をし、前期アンケートよりも10.8ポイント増加しました。昨年、生駒市内の公立小中学校のすべてが、地域住民と保護者が学校運営に参加するコミュニティー・スクールになりました。その運営を担う学校運営協議会では、地域の未来を見通し、どんな地域や子どもを創るのかを協議し、学校の課題や地域の課題解決について話し合っています。

2学期は、鹿ノ台の昔の様子や祭り、消防署の仕事、里山の保全、外国の暮らし、地域交通パトロール、電波について地域の方からお話を聞く機会があり、調理実習の補助、バイオリン鑑賞、和太鼓演奏体験、花壇の整備で地域の皆さんにお世話になりました。地域を知ることは、地域を愛する気持ちを育てることにつながります。このような学校教育活動にご協力いただくため、スクール・サポート・スタッフの支援の基で、教職員のマネジメント力も上がってきたことを実感しています。それが、この設問の肯定的回答の増加につながったと思います。

(11)学校での生活は楽しいですか。

この設問に「そう思う」と回答した児童は60.9%、「どちらかと言えばそう思う」と回答した児童は24.8%で、前期アンケートの結果とほとんど変わりませんでした。つまり、まだ75人の子どもたちが学校を楽しんでいるとは思っていないこととなります。前期アンケート以降、各学級で担任がそれらの子どもたちに聞き取りを行って、学校が楽しくない原因を聞いていますが、今回も同様のことが必要です。子ども同士の間関係のトラブルなのか、学習がうまく進んでいないのか、担任との関係に悩んでいるのか、家庭のことなのか等、原因を聞いて、スクール・カウンセラーやスクール・ソーシャル・ワーカー、教育相談室、通級指導教室、適応指導教

室などの専門家や専門施設とも連携して解決に導きたいと思います。

(12)いじめられて困ったことや悩んでいることがありますか。

この設問に 80 人(15.3%)が「ある」と回答し、前期アンケートより 16 人増加して心配な結果です。いじめが解消されているのかどうかを早く確かめなければなりません。12 月 5 日に、全校一斉に人権に関するアンケートを行う予定ですので、その結果も踏まえて校内いじめ対策委員会で対応について協議したいと思います。子どもたちが担任に言い出せないことかもしれませんので、保護者の皆さんがいじめの兆候を察知されましたら、すぐに連絡していただけるようお願いしたいと思います。